

言語活動と効果的に関連づける文法指導のあり方
－文法指導と言語活動の一体化を目指して－

千葉県立〇〇高等学校 〇〇 〇

1 研究の背景と目的

日本の英語教育改革の必要性が叫ばれ始めて久しい。現在、多くの英語教員が文法訳読法（Grammar Translation Method）やオーディオ・リンガル法（Audio-lingual Method）等の伝統的教授法からの脱却を模索し、コミュニカティブ言語教授法（Communicative Language Teaching）を取り入れた指導への転換を図ろうと日々奮闘していることと思う。しかしながら、文法指導についてはどうだろうか。文法のような言語の形式に焦点をあてた指導では、一般にコミュニカティブなアプローチは行いにくく、教師が明示的な文法説明を行った後に生徒がドリルやエクササイズ等の練習問題に取り組むという指導スタイルが依然として多いと思われる。Ellis（2006）は、こうした伝統的な文法指導が流暢で正確なコミュニケーションに必要な知識の習得にはつながらないことを指摘している。また、Lee & VanPatten（1995）は、伝統的文法指導は意味と文脈の欠如という点から、本質的にコミュニケーションにはつながらないとしている。

平成25年度から実施されている新学習指導要領（文部科学省，2009）では、4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力の育成が目指され、その基礎となる文法はコミュニケーションを支えるものとして「実際に活用できるように」指導することが求められている。しかし、これまで文法を言語活動と切り離して指導することが多かった教員にとって、新しい学習指導要領が意図する指導をどう体现するかは苦慮するところであり、第3款に示された「授業を実際のコミュニケーション場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」ことを踏まえると、文法の指導には相当の改善と工夫が求められる。

本研究では、文法指導と言語活動を効果的に関連づけ、コミュニケーション場面で実際に活用できるようにするための効果的な指導のあり方について考えていきたい。

2 研究仮説

文法指導と言語活動を一体化させた指導を行えば、文法知識の定着に効果があるだろう。

3 研究方法と内容

3.1 文献研究

3.1.1 フォーカス・オン・フォーム

本研究では文法指導と言語活動の一体化を基本としており、その理論的なバックグラウンドをフォーカス・オン・フォームの考え方に依拠している。第二言語習得研究（Second Language Acquisition）において、意味重視のコミュニケーション活動の中で一時的に目標言語形式に焦点をあてた指導がフォーカス・オン・フォーム（Focus on form）と呼ばれ、学習者が目標言語を使用して意味のある活動を行い、その過程において文法習得を促すことがそのねらいとされる。一方、意味のある活動から切り離された文法形式を一つずつ指導するやり方はフォーカス・

オン・フォームズ(**Focus on formS**)と呼ばれ、伝統的な文法訳読法の授業は、指導が意味内容から離れて文法に偏るためこの類型に分類される。これに対して、意味にのみ焦点をあてて、文法に注意を払わない指導はフォーカス・オン・ミーニング(**Focus on meaning**)と呼ばれ、内容中心のコミュニカティブ言語教授法がこれにあたる。この意味で、フォーカス・オン・フォームは文法訳読法とコミュニカティブ言語教授法の間位置し、第三のアプローチと言えるだろう。

和泉(2009)は、言語習得には、それが母語習得、第二言語習得の違いに拘わらず、常に言語形式(**form**)・意味内容(**meaning**)・言語機能(**function**)の三つの要素が関わっており、コミュニケーション能力とはこの三要素を効果的に結び付けていける能力であることから、言語習得の鍵もこれら三要素の密接な結びつきを学んでいくことにありと述べている。また、Doughty(2001)は、フォーカス・オン・フォームは、一つの認知活動において学習者が形式・意味・機能の三つを同時に処理するため第二言語習得を促進するとしており、フォーカス・オン・フォームに基づく文法指導は、意味のある言語活動を行いながら目標言語構造を定着させるうえで一定の効果が期待できると考えられる。

3.1.2 タスク

フォーカス・オン・フォームを活かせる言語活動として第二言語習得研究の分野で注目されているのがタスクである。タスクとは課題解決型の言語活動であり、Ellis(2003)によれば次の特徴を持つ。①意味の伝達が中心である。②何らかの解決すべきコミュニケーションの課題がある。③目的課題があり、その課題が達成されるかどうか重視される。④教室外の世界と何らかの関係がある。⑤評価はタスク達成の成果により行われる。

タスクでは、実際の言語使用場面が設定され、与えられた課題を解決するためにターゲットとなる文法の使用が意図されるため、フォーカス・オン・フォームによる言語形式への焦点化も行いやすく、伝統的文法指導の欠点を解消できる。また、意味のある言語使用をとおして文法の定着を図ることができれば、文法指導と言語活動の一体化を無理なく実行でき、学習者が文法を実際のコミュニケーション場面で使えるようになるうえで一定の効果が期待できると考えられる。

なお、タスクには文法指導を意識しない **Unfocused Task** と文法指導を意識した **Focused Task** があるが、ここで取り上げるタスクは研究の性格上全て **Focused Task** (以下、タスク)である。

3.2 予備実験

平成24年度にリーディングを担当する3年生(n=32)にフォーカス・オン・フォームの考え方を取り入れたタスクに取り組みせ、目標文法構造の知識の定着に効果があるかどうかを検証する。

3.3 実験

平成25年度にコミュニケーション英語Ⅰを担当する1年生を、フォーカス・オン・フォームの考え方を取り入れたタスクに取り組ませる実験群(n=40)と、パタンプラクティス等に取り組ませる統制群(n=40)に分けて指導し、目標文法構造の知識の定着に有意差が生じるかどうかを検証する。

4 研究計画

期 間	平成24年6月～平成25年11月		
段 階	第1段階 (平成24年6月～9月)	第2段階 (平成24年10月～平成25年1月)	第3段階 (平成25年4月～11月)
研 究 の 内 容 と 方 法	【文献調査と理論研究】 ○関係する文献および 先行研究について調 査する。	【授業実践と予備実験】 ○事前調査を行い既習文法構造の 知識の定着について調べる。 ○定着が不十分な文法構造につい て、タスクを用いた授業を実践 する。 ○事後調査を行い、目標文法構造 の知識の定着に効果があったか を検証する。	【授業実践と実験】 ○高校入学段階での英語の 学力を調査する。 ○タスクを用いた指導を行 う実験群とパタンプラク ティス等による指導を行 う統制群を設けて授業を 実践する。 ○ポストテストのデー タを分析し、目標文法構造 の知識の定着に有意差が 見られるか検証する。

5 研究実践

5.1 対象生徒・科目・使用テキスト

平成24年度 (予備実験)	3年生英語コース 1クラス (n=32) リーディング (4単位) Prominence English Reading (東京書籍)
平成25年度 (実 験)	1年生普通科 実験群1クラス (n=40) 統制群1クラス (n=40) コミュニケーション英語 I (4単位) Genius English Communication I (大修館書店)

5.2 予備実験

5.2.1 事前調査

平成24年10月に既習文法構造を網羅する多肢選択式テストを行い、これまでの指導でどの程度知識が定着しているのかを調べた。このテストの結果、仮定法などの一般に定着しづらいと思われる文法項目と並んで、現在進行形の定着に問題があることが判った。例えば次の問題の正答率は31.3%であった。

A: Are you free tonight?

B: I'm sorry, but () dinner with my parents.

1. I had 2. I'm having 3. I've had 4. I'd had

大学進学率の高い本校の生徒の学力を考えると、形式自体は中学 1 年で教わる現在進行形がこれほど定着していないという結果は予想外であった。現在進行形が近い未来を表すことは、高校 1 年時に指導しており、その時は大半の生徒が理解したはずである。しかし、**am/is/are + doing** というフォーム（形式）が、使用される場面によって近未来について述べる機能を持ち、予定の意味内容を伝達することを、同時に処理させるような言語活動を行ったことは一度もなかった。結果として知識は定着せず、3 人に 2 人の割合で正解を選択できなかった。

この現在進行形のケースは氷山の一角だろう。言語使用場面を想定せず、一方的な知識の伝授に終始してしまう授業が、結局は知識の定着にも効果的に機能していない可能性は他の文法項目でも考えられるからだ。今回の調査で明らかになったことは、これまでの文法指導の問題点を象徴的に表していると言えるのではないだろうか。

5.2.2 タスクの作成

タスクの作成にあたっては次の 3 点に留意した。①なるべく双方向性であること。②正答があること。③作成に負担がかかりすぎないこと。

①は、実際の言語使用場面では一般に情報が双方向性を持つ場合が多いからであり、②については、目標文法構造を意識させやすいという理由による。③は、タスクを用いた文法指導を持続可能なものにするために重要だと考えてのことである。

5.2.3 授業実践

フォーカス・オン・フォームの考え方に基づく、タスクを利用した授業を概ね次の手順で行った。目標文法構造は事前調査で定着の甘さが浮き彫りとなった現在進行形、現在完了進行形及び仮定法である。なお、対象が英語コースの生徒ということもあり、授業は ALT とのティームティーチングで行い、原則として英語を使って進めた。

①ALT と JTE が対話をしながら目標言語構造のインプットを行う。

②グルグル方式（パートナーがローテーションで交代する方式）による目標文法構造のパターンプラクティスを行う。

（例）下線部を言い換えて練習しなさい。

A: Are you free tonight?

B: I'm afraid not. I'm having dinner with Ken.

③ペアを作り、それぞれの役割にワークシート A とワークシート B を渡す。お互いのワークシートは見せないように注意する。（図 1 参照）

④ワークシートに書かれている情報を読んで、場面と役割を確認する。

⑤活動に入る前に準備時間（難易度に応じて 5 分～8 分）をとる。この時、同じワークシートを持つ者同士が協力して準備することを認める。

⑥JTE がタスク完了までの設定時間（難易度に応じて 5 分～10 分）を伝えて活動に入る。

⑦活動終了後に何組かペアを選んで実演させ、目標文法構造に関する誤りを ALT が修正（recast）する。（フォーカス・オン・フォームによる「気づき」の促進）

⑧JTE が明示的に目標文法構造について説明する。（日本語使用）

⑨エクササイズ等を行う。

〔図 1〕 ワークシート例 1（現在進行形）

Sheet A

Your friend calls you and asks you to help him/her with homework at a certain hour. You read your schedule (see below) and find it difficult because you have something else to do then. What will you say to your friend?



10:00
11:00
12:00

↓

17:30
18:00

Help mom weed in the garden
Go buy my sister's birthday present

Work at my part-time job

Have dinner with uncle Richard

Sheet B

You call your friend and ask him/her to help you with homework at a certain hour. But your friend seems busy. Write down his/her schedule below to find out what time will be convenient, and make an appointment to meet him/her.

TIME	What to Do

5.2.4 事後調査

授業で扱った現在進行形・現在完了進行形・仮定法過去について、実施後の 12 月と 1 月にポストテスト（プレテストと同型式の多肢選択式）を行い、正答率を調べるとともに、事後アンケートを実施してタスクによる文法指導への感想と目標文法構造を用いてコミュニケーションをすることに対する意識について調査した。

〔表 1〕 文法問題の正答率の推移

	プレテスト(平成 24 年 10 月)	ポストテスト(平成 24 年 12 月)	ポストテスト(平成 25 年 1 月)
現在進行形(近未来)	31.3%	78.1%	71.8%
現在完了進行形	46.9%	75.0%	62.5%
仮定法過去	56.3%	87.5%	84.4%

(n=32)

〔表 2〕 アンケート結果

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
タスクを使った文法の授業は楽しいですか。	62.5%	28.1%	6.3%	3.1%
タスクに積極的に取り組みましたか。	46.9%	40.6%	9.4%	3.1%
タスクを使った文法の授業で英語のコミュニケーション能力が伸びると思いますか。	43.7%	31.3%	21.8%	3.1%
タスクを使った文法の授業で文法が理解できましたか。	56.3%	37.5%	3.1%	3.1%
タスクで学んだ文法を使ってみたいですか。	50.0%	40.6%	3.1%	6.3%

(n=32)

タスクを用いた授業を行った結果、どの文法項目でも正答率は上昇しており、約 2 か月経過しても知識が保持されていた。

また、アンケートの結果から、タスクを使った授業に対して多くの生徒が楽しんで、積極的に取り組み、コミュニケーション能力の伸長について肯定的な感想を持ったことがわかった。

5.3 実験

5.3.1 指導計画

実験群には各レッスンからタスク化が可能な目標文法構造を選び、表3のとおり計画した。

[表3]

Lesson	目標文法構造	タスクの内容
1	It is ~ for... to do	クラスメイトに部活動の勧誘をする。
2	現在完了進行形・過去完了形	「国際派」警官として外国人被害者から事情聴取する。
3	関係代名詞（目的格）	観光客に奈良・京都の穴場スポットを紹介する。
4	比較（倍数表現）	インターナショナルスクールのボランティアとして、壁新聞に載せる特集記事の取材をする。

文型のように指導すべき文法知識ではあってもタスク化することが困難なものや、真正性（authenticity）の点で実際の言語使用場面が想定しづらいものについては、タスクを用いた指導を行わないこととした。統制群には主にパンプラクティスによる指導を計画した。

5.3.2 授業実践

概ね次のとおり授業を実施した。対象生徒が1年生であり、目標文法構造が新出のため、説明については導入部で日本語を用いて明示的に行った。その他は原則として英語で進めた。

（ア）実験群

- ①目標文法構造について簡単に明示的説明を行う。（日本語使用）
- ②平易なドリルを行って言語形式を意識させる。

（例）正しい方を選び○で囲みなさい。

She (has studied / has been studying) since this morning.

- ③タスクで使用が予想される語彙を導入し、タスクの場面設定について触れておく。
- ④ペアを作り、それぞれの役割にワークシートAとワークシートBを渡す。お互いのワークシートは見せないように注意する。（図2参照）
- ⑤ワークシートに書かれている情報を読んで、場面と役割を再確認する。
- ⑥活動に入る前に準備時間（難易度によって5分～8分）をとる。この時、同じワークシートを持つ者同士が協力して準備することを認める。
- ⑦教師がタスク完了までの設定時間（10分～15分）を伝えて活動に入る。
- ⑧活動終了後に何組かペアを選んで実演させ、目標文法構造に関する誤りを教師が修正してフィードバックを行う。（「気づき」の促進）
- ⑨「言語使用場面」「言語形式」「意味」を意識させるエクササイズを行う。

（例）絵を見て[]内の動詞を使ったセリフを考えなさい。考えたセリフをペアで練習しなさい。[wait]



[図2] ワークシート例2（過去完了形・現在完了進行形）

Sheet A	
「助けてください！」	
あなたは君津湾岸署の警官です。いま、一人の外国人があることで君津湾岸署に相談に来ています。署長は英語ができるあなたを指名して、対応するように命令しました。あなたはこの外国人から事情を聞いて、報告書を作成しなければなりません。必要事項を英語で質問して下の報告書を日本語で作成してください。	

報 告 書	
相談者氏名	
年 齢	
出身国	
来日の年と目的は何か？	
君津の住んで何年か？	
君津に来る前はどこに何年住んでいたか？	
相談内容は何か？	
メモ ※相談者が言ったことをそのまま英語でメモしてください。	

Sheet B	
「助けてください！」	
あなたはイギリス人留学生のエマ・ワトソン (Emma Watson)、20歳です。日本語を勉強するために2010年に来日しました。1年前から君津に住んでいますが、君津に来る前は東京に住んでいました。今朝からサングラスをかけた長身の男がずっと自分のあとをついてきているので、怖くなって君津湾岸署に相談にきました。	
◆あなたは君津湾岸署で警察官から英語で事情をきかれます。例にならって次の内容を英語で書いてから相手に話して伝えてください。	
・氏名	My name is Emma Watson. (例)
・年齢	_____
・出身国	_____
・日本に来た年	_____
・来日の目的	_____
・君津に住んでどれくらいか	_____
・君津に来る前はどこに何年住んでいたか	_____
・何を相談しにきたか	_____

〔図3〕ワークシートB生徒記入例

年 齢	20才	When came in Japan? and what purpose
出身国	イギリス	
来日の年と目的は何か?	2010年、日本語を勉強するため。	
君津の住んで何年か?	1年	
君津に来る前はどこに何年住んでいたか?	東京に2年間住んでいた。	
相談内容は何か?	朝方、背の高いサングラスをした男が つけてくる。	
メモ ※相談者が言ったことをそのまま英語でメモしてください。 ・ My name is Ema Watson. ・ I'm 20 years old. ・ I'm from the United Kingdom. ・ I went Japan in 2010. I went Japan to study Japanese. ・ I have lived in Kimitu for one year. ・ I had lived in Tokyo before for two years. ・ The taller man putting on sunglasses has been following me since this morning.		

(イ) 統制群

- ① 目標文法構造について丁寧に明示的な説明をする。(日本語使用)
- ② 平易なドリルを使って言語形式を意識させる。

(例) 正しい方を選び○で囲みなさい。

She (has studied / has been studying) since this morning.

- ③ グルグル方式によるパンプラクティスを行う。

(例) 下線部を言い換えて練習しなさい。

A: You look tired. What have you been doing?

B: I have been playing soccer.

- ④ 言語形式の習得を意図したエクササイズを行う。

(例) []内の動詞を適切な形にしなさい。

He [watch] TV for three hours.

- ⑤ 誤りを教師が修正してフィードバックを行う。(日本語使用)
- ⑥ 音読をする。

6 研究評価

6.1 事前の英語学力調査

実験群と統制群の英語学力の調査にはスタディーサポート (ベネッセコーポレーション) を利用した。本校では入学直後に全員が同日受験しており、学力を調査するのに妥当と考えた。両群の英語学力リサーチの結果は表4のとおりである。文法問題の正答率では統制群の方が高いが、読解問題については実験群が統制群を上回っている。バランスは異なるものの、トータルの正答率は近似であった。

〔表 4〕スタディーサポート英語学カリサーチ結果

診断項目	実験群（n=40）	統制群（n=40）
文法	66.4	69.4
語彙	61.3	59.8
文構成	56.0	56.5
読解	59.0	54.5
計	62.9	63.2

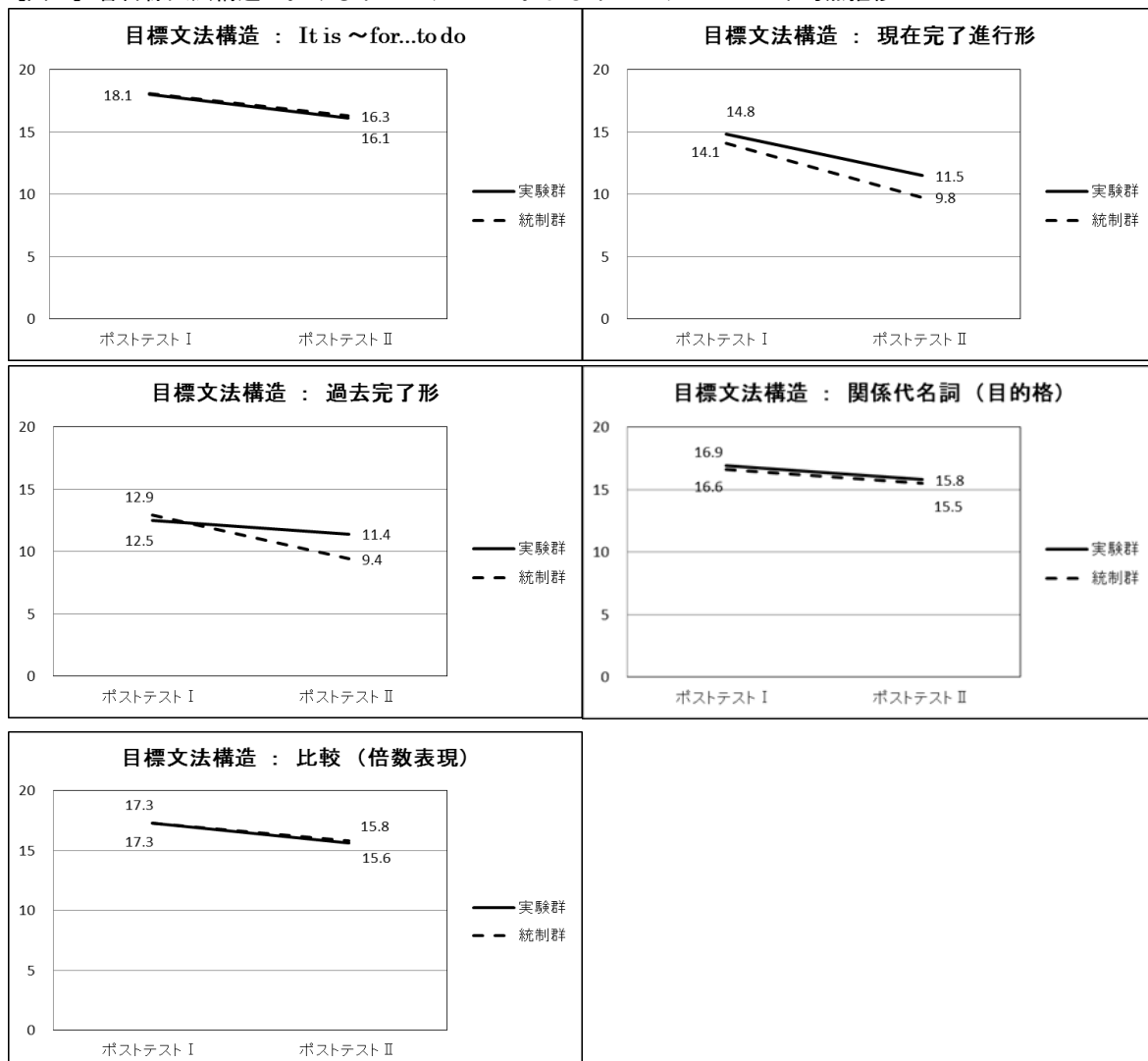
6.2 検証

数字は正答率(%)

各目標文法構造について、授業実施から1週間後のポストテストⅠ，授業実施から3週間後のポストテストⅡにおいて多肢選択式テストを実施し、実験群と統制群の正答率に有意差が見られるか調べた。（ポストテストについては Appendix 2 参照）

図4からわかるとおり、今回実験したどの目標文法構造でもポストテストⅠでは正答率に違いはほとんど見られなかった。一方ポストテストⅡでは、現在完了進行形と過去完了形の平均点に違いが見られた。統計的に有意かどうかを確かめるために有意水準5%で両側検定の t 検定を行ったところ、現在完了進行形で $t(78)=1.408, p<0.2$ 、過去完了形では $t(78)=1.517, p<0.2$ が得られたが、統計的に有意とは言い切れない結果であった。

〔図 4〕各目標文法構造におけるポストテストⅠおよびポストテストⅡの平均点推移



6.3 アンケート

検証の最後に実験群にアンケートを行い、タスクを使った授業に対する意識調査を行った。結果は表5のとおり。

[表5] アンケート結果

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
タスクを使った文法の授業は楽しいですか。	62.5%	20.0%	10.0%	7.5%
タスクに積極的に取り組みましたか。	70.0%	15.0%	15.0%	0%
タスクを使った文法の授業で英語のコミュニケーション能力が伸びると思いますか。	32.5%	45.0%	20.0%	2.5%
タスクを使った文法の授業で文法が理解できましたか。	20.0%	50.0%	25.0%	5%
タスクで学んだ文法を使ってみたいですか。	35.0%	32.5%	25.0%	7.5%

タスクを使った授業に対して好感を持ち、積極的に取り組んだ生徒が80%を超えたことに加えて、コミュニケーション能力向上への効果について肯定的に捉える生徒が約77.5%、タスク授業による文法理解を肯定的に捉える生徒が70%、タスクで学んだ文法を使ってみたいとする生徒の割合も67.5%に及ぶことがわかった。全体的にタスクを使った授業を支持する生徒の割合は高いと言える。

6.4 考察

今回の実験では、時期が高校入学直後ということもあり、中学既習事項や中学既習事項をベースとするものが目標文法構造に含まれていた。ポストテストの結果に大きな差が見られなかった要因として、高校入試や入学前に行う課題の影響を無視することはできないかもしれない。

また、実験の検証方法として多肢選択式テストを用いたが、このタイプのテストが正確に目標文法構造の知識を測定できているのかについては、議論のあるところだと考える。そもそもテストで測定対象とする文法知識とはどのようなものなのか、コミュニケーションを支える文法能力をどのようなテストで測定するのかについて、調査研究が不十分であったと反省している。

一方、本研究において情意面で生徒から肯定的な反応があったことは意義深い。タスクを用いた指導を行うことで、文法学習を机上から実際の言語使用場面へと移行させ、多くの生徒に文法が実際のコミュニケーションに役立つことを実感させることができた。これは新学習指導要領が目指す文法指導の方向性に沿うものであり、今後の指導のあり方にとって一つの可能性を示唆するものと考えられる。

7 結論

本研究は仮説に対して統計的には有意な結論を得ることはできなかった。しかしながら、本研究のアプローチが伝統的な文法指導に比べて効果が期待できないという結論に至ったわけではない。情意面で生徒の文法学習に対する意欲を引き出すことに一定の成果が見られたことを踏まえ、今後は更に工夫と改良を重ねることによってより良い実践へとつなげていきたい。

8 引用文献・参考文献

8.1 引用文献

- Doughty, C. (2001). Cognitive understanding of focus on form. In P. Robinson (Ed.), *Cognition and second language instruction*, pp206-257, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, R (2003). *Task-based language learning and teaching*. Oxford: Oxford University Press
- Ellis, R (2006). Current Issues in the teaching of grammar: An SLA perspective. *TESOL Quarterly*, Vol.40, Issue 1, pp83-107
- Lee, J. F., & VanPatten, B. (1995). *Making communicative language teaching happen.*, New York, McGraw-Hill.
- 和泉伸一 (2009) 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』大修館書店
- 文部科学省 (2009) 『高等学校学習指導要領 外国語編』

8.2 参考文献

- Doughty, C. & Williams, J.(Eds.). (1998) *Focus on form in classroom second language acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lightbrown, P. & Spada, N. (1993). *How languages are learned (revised ed.)*. Oxford: Oxford University Press.
- 高島英幸 (編著) (2000) 『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』大修館書店
- 高島英幸 (編著) (2005) 『英語のタスク活動とタスク』大修館書店
- 高島英幸 (編著) (2011) 『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』大修館書店
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店

APPENDIX 1 ワークシート例（関係代名詞目的格）

Sheet A

「ボランティアガイド」

あなたは、外国人観光客に京都と奈良を英語で案内するボランティアガイドのケンです。観光客にあまり知られていないオススメスポットを紹介しつつ、観光客のリクエストを聞いて案内のプランを立てるよう心がけています。今日はカナダ人観光客のジャッキーを案内するプランを提案してください。

☆印はあなたから話しはじめます。

☆1 ジャッキーに行きたい場所ややりたいことを質問して、リクエストを書き取ってください。

2 ジャッキーがオススメの場所をきいてくるので、次の情報をもとに紹介してください。

○京都にはあまり外国人観光客が訪れないお寺があります。円通寺（えんつうじ）は美しい日本庭園があるお寺です。

☆3 案内プランをまとめてジャッキーに提案してください。OKが出れば完了です。

CLASS NO. NAME

Sheet B

「ボランティアガイド」

あなたは、カナダ人観光客のジャッキーです。滞在しているホテルで、京都と奈良を英語で案内してくれるボランティアがいることを知り、連絡したところケンを紹介してもらいました。これからケンのオススメスポットを覚えてもらいながら、あなたが訪れたい場所をリクエストして、観光プランを立ててもらいましょう。

☆印はあなたから話しはじめます。

1 ケンが行きたい場所ややりたいことを質問してくるので、次のリクエストを伝えてください。

①世界で一番古い木造のお寺に行きたい。

②足利義満が建てた金のお寺に行きたい。

③京都の人が大好きなお菓子を買いたい。

☆2 ケンにオススメの場所をきいて、メモを取ってください。

3 ケンの提案を聞いてプランを書き取ってメモをとり、内容がよければOKしてください。

CLASS NO. NAME

APPENDIX 2 ポストテスト例（現在完了進行形・過去完了形）

Choose the best answer to complete the sentence.

(1) You're out of breath. Have you ()?

1. run 2. been running 3. be run 4. been run

(2) Tom () his key. He can't get into the house.

1. lose 2. lost 3. has lost 4. had lost

(3) When Sara arrived at the party, Paul () gone home.

1. has already 2. had already 3. has been 4. had been

(4) () since lunchtime. I wonder if it'll stop raining soon.

1. It rains 2. It's been raining 3. It had rained 4. it rained

(5) Ann had just got home when I phoned. She () in London.

1. was 2. has been 3. had been 4. is

(6) Ben () on the phone for more than one hour.

1. talks 2. is talking 3. has talked 4. has been talking

(7) Ken couldn't play in the game because he () his ankle.

1. twists 2. twisted 3. has twisted 4. had twisted

(8) Where have you been? Have you () tennis?

1. played 2. been playing 3. been played 4. play

(9) I'm hungry. I () anything since breakfast.

1. don't eat 2. haven't eaten 3. didn't eat 4. hadn't eaten

(10) Before I became 10 years old, I () English for two years.

1. study 2. studied 3. have studied 4. had studied

Choose the best answer to complete the sentence.

(1) My mother () been abroad before she got married.

1. is never 2. has never 3. was never 4. had never

(2) Ken used to take the bus, but he () the train since Monday.

1. takes 2. took 3. is taking 4. has been taking

(3) Mary is still writing letters. She () letters all day.

1. is writing 2. has written 3. has been writing 4. was written

(4) Chuck had an operation five years ago. Since then he () in good health.

1. is 2. was 3. has been 4. had been

(5) Can I use your cellphone? My cellphone's battery ().

1. is died 2. was died 3. has died 4. had died

(6) A: Sorry, I'm late.
B: That's all right. I () long.

1. don't wait 2. didn't wait 3. am not waiting 4. haven't been waiting

(7) You look tired. () hard?

1. Have you worked 2. Have you been working
3. Did you work 4. Are you worked

(8) When Ellen arrived at the ticket counter, she realized she () her passport at her home.

1. leaves 2. left 3. has left 4. had left

(9) I lost my cellphone I () the day before.

1. buy 2. was buying 3. have bought 4. had bought

(10) I () in New York for eight years before I moved to Boston.

1. lived 2. have lived 3. have been living 4. had lived

（注 ポストテストには目標文法構造以外も出題している）